2018-1

やさしい囲碁史

第13回

捨て石で名を残した僧

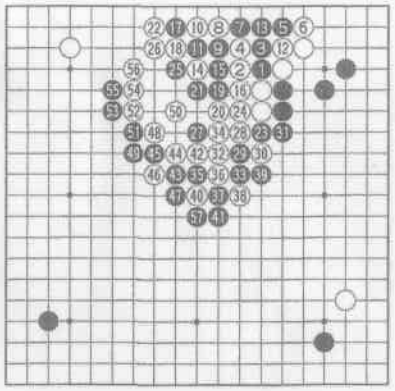
古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

戦国の世が終わり江戸時代に入ると囲碁の普及が進み、家元の棋士と遜色ない在野の打ち手が現れるようになった。加賀国（現在の石川県）出身で僧の小松快禅（生没年不詳）もその一人。

平安時代の「碁聖」寛蓮に始まり初代本因坊算砂、算砂のライバル利玄など僧侶には碁の達人が多かった。後に十世本因坊となる本因坊烈元（1750～1809）が六段の時に、五段格を認められていた快禅は先の手合で十番碁を打ち、５勝５敗の打ち分けだったというからその実力は折り紙付きだ。

快禅は当代一の賭け碁打ちでもあったようで、江戸中期に活躍した講釈師の馬場文耕は1757（宝暦７）年『当世武野俗談』で次のように書き、快禅を将来最強の打ち手になるだろうと激賞している。

「江戸に常住して囲碁の名人と云へば、増上寺塔中所化快全（快禅を指す）、是今の世の碁に妙を得たる人なり。今年若なれば、此上後年は日本にて此僧の上を越す碁は有るべからずと云、不思議の上手出来るものぞかし」



快禅黒番。右上は小目の相コスミ定石からの大変化。白番の棋士は明らかでないが、快禅に対して白を持つくらいだから家元の強豪かもしれない。

快禅の残した最も有名な棋譜。黒１の切りがハメ手の一種で黒57まで捨て石で勢力を築いた。上辺の黒十数子は取られたが外回りの厚みは圧倒的で黒優勢。一連の手順は「快禅の大塗り」と呼ばれ現代でも手筋集などで紹介される。

2018-2

やさしい囲碁史

第14回

受験の神様と囲碁

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

毎年１月、２月は受験生にとって「真剣勝負」の季節である。志望校合格を目指す受験生や親から頼りにされる「神様」といえば平安時代の貴族、菅原道真（845～903）が一番に挙げられるだろう。

道真が祭られている場所は関西なら京都・北野天満宮、関東では東京・湯島天満宮が有名で、合格祈願の絵馬を奉納する光景はテレビなどでおなじみだ。

「囲碁」
手談幽静処
用意興如何
下子声偏小
成都勢幾多
偸閑猶気味
送老不蹉跎
若得逢仙客
樵夫定爛柯

幼少時から詩歌をはじめ学問に優れた道真は宇多天皇と醍醐天皇に仕え要職を歴任。両天皇も碁をたしなんだという。みかどの寵愛（ちょうあい）を受け右大臣にまで上ったが、有力貴族の藤原氏にうとまれ、901年昌泰の変で九州の大宰府に左遷、京から遠く離れた地で生涯を終えた。死後、天災が立て続けに起きたことが道真の霊のたたりとされ、神として祭られるようになった。左の漢詩は道真が当時の文人のたしなみとして親しんだ碁を詠んだ作品。題名もそのものずばり「囲碁」で大意は以下のとおりである。

「山奥のような幽静な場所で碁を打ち、意を用いる（いろいろと気を配る）ことは実に興が深いことである。石（子）を盤に下す、その音は小さくとも碁盤のマス目に似た都を成す勢いのようだ。閑を偸（ぬす）んで碁を打つことで、年老いてからも時を無駄にしない。もし碁を打つ仙人に出逢ったら、斧の柄が朽ちるのも忘れたあの樵夫（きこり）のように時を忘れて夢中になってしまうだろう」

左遷の数年前に都で詠んだとされる。多忙な公務の合間に時間を作り好きな碁を打ったこと、碁に対する深い愛情が伝わってくる。